

乳がんのリスクを 「見える化」

見えない危険性を
可視化し、伝え、
共有する

企画協力：門澤秀一 神鋼記念病院放射線センター長

インナービジョン8月号恒例の特集企画「Women's Imaging」。2022年は、Breast Imagingに焦点を当て、「乳がんのリスクを「見える化」—見えない危険性を可視化し、伝え、共有する—」と題し、乳がん検診・診療の最新動向を取り上げます。近年、検診やゲノム医療、病理において、乳がんのリスクを「見える化」する技術が目覚ましく進歩しています。そこで、これらの技術がどのように活用されているのか、その最前線に迫ります。さらに、乳がんリスクを「見える化」するモダリティについて、マンモグラフィ、超音波診断装置、MRI、PETの臨床の現状や今後の展望をご報告いただきます。

乳がんの検診・医療 — リスクの「見える化」が推進

門澤 秀一 神鋼記念病院放射線センター

今夏の乳房画像診断に関する特集の企画では、乳がんのリスクを「見える化」することについて焦点をあてていく。近年、数多く整備されてきた各種の医療ガイドラインを紐といてみると、乳がんだけでなく、どの領域においても「リスク」の言葉が数多く並んでいるのに驚かされる。今日の検診・医療は、患者が被る可能性のある「リスク」に基づいて層別化され実践される時代になったといっても過言ではないように思われる。近年の診断や治療の技術の進歩には目を見張るものがあるが、最新医療技術の実践には相応のコストが発生す

ることも少なくない。また、実践できたとしても、すべての患者がその恩恵を等しく受けられるわけではない。患者一人一人が違うように、効果の発現や合併症の発生などの利益と損失のバランスは患者ごとに異なってくる。活用できる医療資源には限界があり、効率面を重視すると、すべての患者に最新のサービスを均てん化して充当することは困難と言わざるを得ない。そのような状況で、サービスの適応を層別化する重要な基準の一つになっているのが「リスク」であると思われる。

医療分野におけるリスクの「見える化」

さまざまな定義がなされているが、「リスク」とは物事が予想どおりに進まず、不良あるいは不利益な事象が不確定に生じる可能性や危険性を指す言葉とされている。今日、検診や医療では数多くのデータが蓄積され、それらの客観的・疫学的観察や統計学的解析が進むことによって、科学的根拠、いわゆるエビデンスが次々と構築されてきている。本来、リスクはわかりにくい・現れにくいもの